紀　要　委　員　会

委員長　薄井　　明
委　員　八木こずえ　　御厩美登里
　　志水　　朱　　近藤　尚也
　　井上　貴翔

編　集　後　記

今年も12月20日の発行日に『看護福祉学部紀要』を刊行できました。昨年２月以来続くコロナ禍の状況下、投稿してくださった先生方には心から感謝申し上げます。

コロナ禍二年目の今年は、昨年よりは冷静に、少し余裕をもって対応できたとはいえ、まだまだ不自由でストレスフルな一年でした。５月･６月の第四波、８月の第五波の感染拡大は、昨年の感染「パニック」が何だったのかと思うほどの猛威でした。新型コロナウィルスの脅威が本当に身近に感じられた年でした。それが落ち着くきっかけとなったのは、何といっても、本学でいち早く実施した６月からの職域接種です。自分の職場が医療大であることをこれほど誇らしく思ったこともありません。全面的に対面授業には戻りませんでしたが、教職員・学生の二回接種が夏休み前に完了したことで「ウィズ」コロナの生活が見えてきた実感がありました。この編集後記を書いている11月下旬時点で、全国の新規感染者数は一日100人前後、北海道は10人前後の低水準で推移しています。「感染拡大→行動自粛→感染縮小→気の緩み→感染拡大」を繰り返してきた二年間だったような気もしますが、一部の人の気の緩みを除けば、公共の場でのマスク着用やマスク無しの他人との会話自粛などの感染防止行動は国民・道民に定着したといえるでしょう。

さて、コロナ禍による大学教育や研究への負荷は、昨年より減ったものの、依然残る状況の中、紀要委員長としては「『看護福祉学部紀要』の投稿希望者が少なくなるのではないか」と正直今年も懸念していました。しかし結果は、むしろ例年よりも多い10本の投稿でした。改めて看護福祉学部の“底力”を感じるとともに、どんな状況でも「教育も研究も」の姿勢が看護福祉学部教員に浸透していることに感服しております。

ワクチン接種が日本より先行して実施されたヨーロッパで再び感染が拡大し、オーストリアのようにロックダウンする国も出てきています。（オミクロン株という変異種が南アフリカで感染拡大しているとの心配な情報もあります。）日本が同じような道をたどるのか、それとも世界に先駆けて「ウィズ･コロナ」の生活が実現されるかの分かれ道にさしかかっています。いずれはCOVID-19も普通の季節性の風邪と変わらないものになるはずです。その時期が早いか遅いかの違いですが、来年が「コロナ禍の非日常」から「コロナとともにある新しい日常」へと転換する元年になることを信じて、自分が今できること、すべきことに専心しようと思いを新たにしている2021年の暮れです。（薄井明）